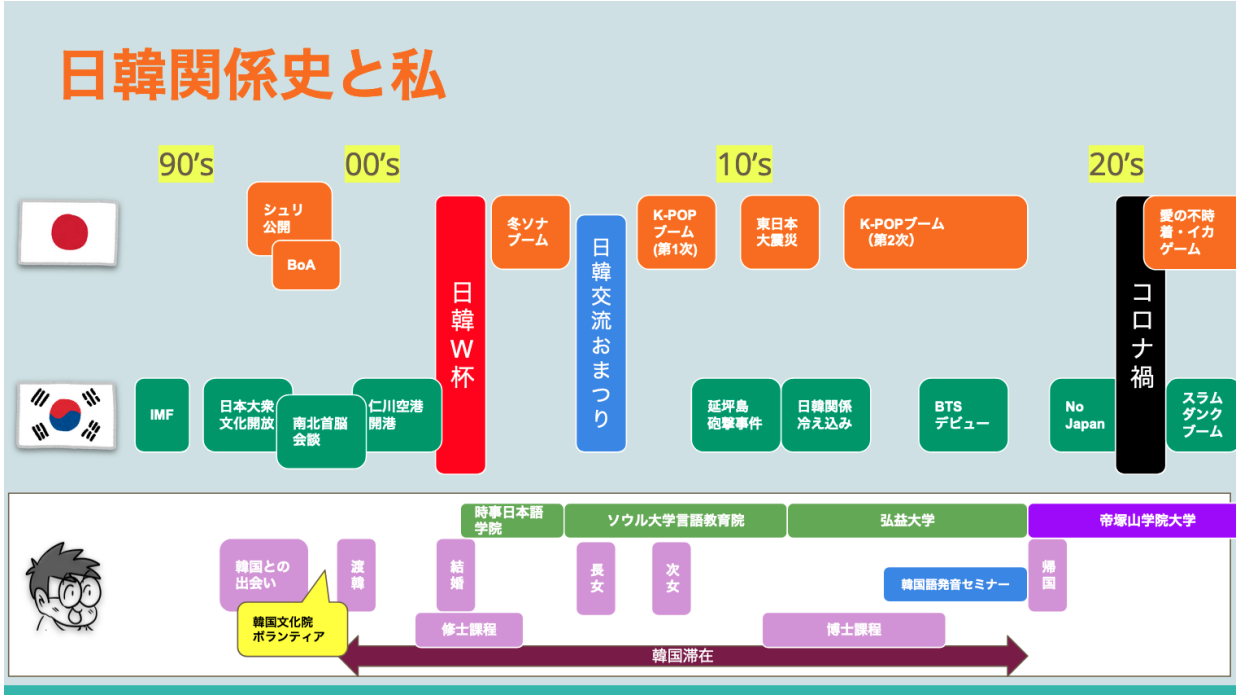
自分なりの韓国との付き合い方　−韓国語教育者の視点−

帝塚山学院大学リベラルアーツ学科准教授
稲川右樹

日韓両国の人的・文化的交流はコロナ禍を乗り越えてますます盛んになっている。特に若者たちは、既存世代が持ち合わせていた様々なしがらみとは無関係に、非常に屈託無く韓国と触れ合っている。しかし、それでも両国に横たわる歴史的・政治的な問題の根は深く、無防備な若者たちの前に折に触れて立ちはだかる。憧れていた韓国での思いがけない確執に直面した時、彼らはショックを受け、当惑し、そして時には過剰な拒否反応を起こしてしまうことすらある。

歴史的・政治的問題の大きさに対して、一人の個人はあまりにも小さく非力である。私個人も「韓国とどのように向き合っていけばいいのかわからない。」という相談を教え子やSNSで繋がった若者から受けることがある。今回の講演では、彼らよりも少しだけ昔から韓国と付き合ってきた「元若者」として、自らの経験を通じて会得した個人としての韓国との付き合い方について助言をしたいと思った。

下は講演で「日韓関係史と私」として提示したスライドである。私がそれまで全く興味がなかった韓国と出会い、韓国語を学び始めたのは1999年のことだ。日本に「韓流」という言葉が存在せず、「アンニョンハセヨ」すら知らない人が多かった時代のことである。それから現在に至るまでの韓国との関わりを、日韓関係の主な出来事と合わせて整理したものだが、これを見ると自分にとっての韓国との付き合いが、奇しくも日韓両国の人的・文化的交流が盛んになっていった時代と見事にオーバーラップすることが再認識できた。



私が韓国と本格的な関わりを持つようになったのは、日韓W杯を控えてそれまで「近くて遠い国」と言われてきた日韓の間で、人的交流が徐々に盛んになり始めていた時代である。

教科書やニュースでしか見聞きしたことのない存在だった日韓両国の市民同士が、お互い人と人として触れ合う「リアルな交流」が本格化した時期だと言って良い。韓国においてはそれまで禁止されてきた日本大衆文化の開放が進み、日本ドラマやJ-POPを通じて日本に興味をもつ若者が増えていた。また、日本においても韓国映画「シュリ」が異例のヒットを記録したり、人気絶頂のアイドルグループSMAPのメンバーである草彅剛が韓国語を学ぶなど、少しずつ韓国に対する関心が高まってきた頃である。日韓両国は今までの歴史的・政治的なしがらみを乗り越え、手に手を取って新時代を切り開いていくパートナーになれるかもしれないという期待も高まっていたし、私個人としても韓国で生活を送る中で日本人であることが様々な場面でむしろ歓迎される要因となりうることを実感していた。

しかし、歴史問題や領土問題などの問題はまるで周期的に流行する感染症の波のように立ち上がり、それは個人の生活にも少なからず影を落とした。私自身も出会ったばかりの人から歴史問題や領土問題についての見解を強く求められて困惑したことがある。特に日本で韓流ブームが起こり、韓国に憧れて留学にやってきた若者が、そのような体験を通してショックを受け、むしろ韓国に対する反感を抱いて帰国するというケースも何度となく目にした。様々なケースを見ていると、それらの確執の原因には、日本人と韓国人の間の「知識の不均衡」があると思う。どのような問題であれ、自分なりの判断を下す基準となるのは知識である。それは韓国人が何を知っているか、何をどう学んでいるかということに対する知識はもちろん、自らの国や言語についての知識にも該当する。それらを踏まえた上で本講演では、これから韓国とつきあう人や、韓国との付き合い方に悩んでいる方々（特に若者）に以下の７つの提言をさせていただいた。

1. 日本(語)についてよく知る。
2. 韓国人が知っていることを知ってみる。
3. 「自分はどう思うのか」を考える。
4. その際、自分の目と耳と心を判断基準にする。
5. ただし、その結論は心にしまっておけば良い。
6. 不要な踏み絵は踏まなくて良い。
7. 個々人のつながりの大切さを信じる。

最後に、私がいつも心の支えとしている「ウルトラマンエース」最終回の、地球を去るウルトラマンエースが地球の子どもたちに残したメッセージ「やさしさを失わないでくれ。弱いものをいたわり、互いに助け合い、どこの国の人たちとも友だちになろうとする気持ちを失わないでくれ。たとえ、その気持ちが何百回裏切られようと。それがわたしの最後の願いだ」を紹介させていただいた。日本と韓国の間には今後も様々な問題が噴出することは想像に難くない。しかし、それでも大きな流れとしては日韓両国の市民同士の交流はこれからますます緊密になり、多くの人々の人生を豊かにしていくことを願ってやまない。